

人間は言葉を得る代わりにリスクを背負った

介護福祉学科教授 宮下正弘 (2015.2.16)

みなさんは人間以外は言葉を喋れない、と言うことはご存じでしょうね。人間には食道と気道を共有する咽頭腔という空間があって、ここで声帯から出る微妙な振動を増幅させて、口から声として出せるのです。唇をうまく使えばパ、ピ、プ、ペ、ポ、となり、舌の先を上顎の歯の後ろにつければタ、チ、ツ、テ、ト、と声が出ます。このように我々が様々な言語を話せるのは声帯、舌、唇などを使って空気を口から出せるからです。言葉の獲得は脳の進化におおいに貢献し、文化を育て、現在に至っているのはこのお陰です。

人間に一番近いというチンパンジーでも言葉は喋れません。ましてや犬や猫はワンとかニャーとかは出ますが、言語で話す能力に欠けています。彼らは喉頭が高く突き出て鼻腔の後ろに入りこんでいるので、基本的に口から空気が吐き出せない、鼻に抜ける仕組みになっているのです。いわば食道と気道とが別になっているのです。

さて、人類は言葉を得たことで大進化を遂げたことは大変結構なことですが、そのためにとんでもないリスクを背負ってしまったのです。そう、それは「誤嚥」です。水を飲んでむせたり、雑煮の餅で窒息したり、寝ている最中に、逆流してきた胃液が気管に入ってしまったたり、要するに空気しか入らない管の気管にそれ以外のものが入る、これも進化の見返りに得たリスクです。

他の動物では気道にもものを詰まらせるということはないのです。空気の通路と食物の通路が立体交差になっていて、誤嚥のような事故は起こさない。立体交差の方が安全なのに、我々人類は敢えてリスクを冒して交差点方式をとっている、それがわれわれの音声や言語を可能にしているということになります。声というのは文化の基礎であり、文化的な生活は人命の犠牲の上に成り立っていることになります。

ではいつ頃そのような変化が起きたのでしょうか。声の化石は勿論ないし、咽頭や喉頭、声帯の化石もないので、骨から推測する(正確には骨に付く臃の面など)のですが、おそらく数十万年前に生じた咽頭腔と喉頭腔の遺伝的変異が直立歩行などによって、口腔と咽頭腔が直角になり、咽頭が次第に下方に移動して複雑な話し言葉を可能にする空間となり、言語を獲得した。それが4～5万年前に起こった人間への大躍進の原動力となったと推測されています。人類を人間たらしめているのは脳容量の増大や2足直立歩行や手の使用ではなく、のどの解剖学的な構造変化だったのですね。

では人間は生まれつき言葉を話せるかというところではありません。3か月までの赤ちゃんののどはチンパンジーと同じなんです。だから、赤ちゃんは乳を飲むとき咳き込まない、呼吸と乳を飲む通路は別々なのです。お母さんのおっぱいを飲みながら、鼻を鳴らして呼吸もしているのです。あやすと「アー」とか「ウー」とか笑っているように思えるのは、チンパンジーのように鼻を鳴らしているだけ。本当に赤ちゃんらしい笑い声を立てるのは3ヶ月を過ぎてから。この時期に下顎の発達とともに咽頭が下がり始め、やっと声帯を使って笑い声や言葉を口から出すことができるのです。猿のようだった赤ちゃんが人間らしくなる、あの笑い声を聞くのは親にとって最も楽しいときです。

こうして乳児期、幼児期、学童期、成人期、壮年期と言葉を駆使しながら私たちは人生

を送って行くのですが、老年期に入ってくると、言葉の代わりに得たネガティブな「誤嚥」がいよいよ顔を出してきます。2011年から死亡原因の3位に脳血管障害に代わって肺炎が入ってきました。その大部分は75才以上の高齢者の誤嚥に関係した肺炎です。どうしても反射機能が落ちる、老化現象の一つでもあり、やむを得ない面でもあります。高齢者の嚥下性肺炎による死亡は、自然死に近いと言う人もいます。

そうであれば、それまでのうちに獲得した機能、『口から言葉を出せる』機能を大いに活用し、語り、歌い、笑う、人生有意義に過ごすのがいいのではないのでしょうか。「人間らしく生きる」、それは大いに言葉を発する、ということになるのかも知れませんね。

—参考図書—

- ① 『長生き病』を考える：老年医学の道を歩んで」小澤利男著 東京図書出版 2012.9
- ② 「医療職をめざす人の解剖学はじめての一步：東大講義録」坂井建雄著
日本医事新報社 2013.2
- ③ 「人類はどこまでチンパンジーか」J.ダイヤモンド著；長谷川真理子訳
新曜社 1993.10

*当館にも所蔵しております。

②491.1:Sa29